

## 『明日のハナコ』

2022年02月25日

『週刊金曜日』は2月18日号で、「消されかけた高校演劇『明日のハナコ』」を特集している。「東京新聞」は2月20日の朝刊社説で、「今日は深刻な問題をお伝えします」と前置きして「ハナコ 君は悪くない」を掲載している。

福井県高校演劇祭で、県立福井農林高校演劇部によって『明日のハナコ』が上演された。脚本は、同校の上演当時、部活動指導教諭だった玉村徹氏である。コロナ禍で、関係者以外は無観客の上演で、一般の人には、恒例の福井ケーブルテレビで放映することになっていた。ところが、「特定の個人や学校への非難、原発という繊細な問題の扱い方、差別用語の使用などについて懸念している」とクレームがあった。これを受けて、演劇祭の顧問会議が開かれ、『明日のハナコ』の放映はしない、記録画像の公開を禁止し、脚本を回収する、という三つの決定が下された。現在の教育界で、「焚書坑儒」のような考えられないことが起こった。当然、「表現の自由」が侵害されると、反発が起こり、大きな論争になっている。細かい議論は書けないが、問題点は三つあると理解している。

一つは、特定個人の非難の問題である。劇中のセリフに「原発を批判する人たちはよく『地震が来て原子炉が壊れたらどうするか』とか言うじゃない。ということは、逆に原発としては、地震が起きても大丈夫なように、他の施設以上に気を使っているはず。だから地震が起きたら、本当はここに逃げるのが一番安全だったりする。(笑) (『週刊金曜日』の要約版脚本より)」という言葉がある。福島原発事故で、これがいかに暴論であるかが判明したが、この言葉は、北野武氏が、ビートたけし名義で『新潮45』誌上で語った言葉である。セリフは、「間違っていたら間違っていました、って反省するくらいのことはしてほしい。こどもだって謝るんだよ。でも北野タケシは大人だから」と続いている。これは、個人非難ではない。彼の発言そのままを引用し、間違いを指摘しているに過ぎない。

二つ目は、差別用語「カタワ」という言葉が使われている問題である。セリフに「まあ原子力発電所が来る。電源三法の金はもらうけど、そのほかに地域振興に対して裏金よこせ。協力金よこせ、というのがそれぞれの地域にある。お宮さんの修理のために原電、動燃、北陸電力に頼んで三億円できた。そんなわけで短大は立つわ、高校はできるわ、50億円で運動公園はできるわ。そりゃもう棚ぼた式の街作りができる。そのかわり100年たってカタワが生まれてくるやら、50年後に生まれた子供が全部カタワになるやら、それはわかりませんよ。わかりませんが、今の段階で原発をおやりになった方がいい(同上より)」とある。呆れた発言であるが、これは敦賀元市長が、原発建設の話が持ち上がった時、地元商工会に招かれて、しゃべった言葉である。これがマスコミに漏れて、世論の批判を受け、次の選挙で落選したという。差別用語の「カタワ」と言った敦賀元市長の言葉をそのままセリフに使った訳で、脚本を書いた玉村氏や演技した高校生に責任を負わせるものではない。こんな思想で、原発が誘致されたのかと啞然とする。

三つ目は、表には出ていないが、ハナコが明日を求めて原発に反対するセリフをもみ消そうとしている問題である。「東京新聞」は「この問題の本質は、差別の問題に名を借りた原発批判の封じ込めともなりかねません」と見抜いている。温暖化阻止のために、原発容認論が持ち上がっている。この論に沿って、原発稼働を後押しする世論を形成しようと、教育界も、反原発の声を抑え込もうとするほど、同調圧力は強まっているのかと、恐怖を感じた記事であった。原発は、子どもたちの未来を考え、断固、反対である。